奈良市農村民家調査

建造物研究室

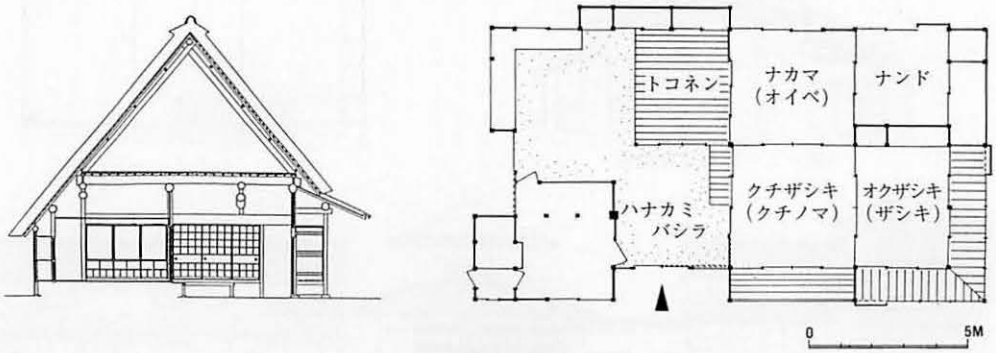
昭和58年度から4ヵ年にわたり奈良市全域において，農村民家の悉皆調査を行った。過去3ヵ年は一次調査として主に外観からの調査を行い，調査物件は130集落・約1,000棟におよんだ。本年度は一次調査物件より良質な農家39棟を抽出し，二次調査として平面・断面の実測，復原調査，聞き取り調査を行った。

建築年代は幕末から明治のものが多いが，17世紀頃と考えられる武野義正家（大安寺町）を最古として，18世紀以前に遡ると考えられるものが8棟みられた。資料より建築年代が明確になるものとしては堀内薫家（高樋町　享保二年　棟札）が古い例である。棟札を残すものは堀内家以外にはなく，板絵図，墨書銘，過去帳，祈禱札によって年代が判明したものが数棟あった。

平面形式は二間取，三間取，四間取，六間取があり，大規模なものとしては，九間取の武野義正家がある。四間取が26棟と最も多く，次に六間取が6棟，その他が数棟づつである。四間取の一般的な部屋構成は下図のとおりである。四間取では喰違い間取は少なくほとんどが整形四間取となり，喰違い間取の場合はナンドが狭くなる。六間取は比較的新しく，古いものでも19世紀前半頃と考えられる溝口忠男家（佐紀西町）があるにすぎない。また3棟は明治時代に落棟座敷を増築し，四間取から六間取となったものである。三間取は数少なく（3棟）19世紀前半から中頃のものであるが，いずれも前座敷型の三間取である。

座敷は一般的に表側にある。座敷とナンド境に床・仏壇を設けナンドを閉鎖する形は東山の山間部に限られ，明治頃迄みられる。居室土間境には，ツキトメ溝または1本溝により板戸を片側に引き込む形をとるものがあり（約4割），両形式とも明治まで存続する。居室間にもツキトメ溝を用いるのは岩本泰一家（長谷町　18世紀初）のみである。さらに古風な形を残すものとして，クチザシキの土間境を土壁で閉ざす清水龍三家（南椿尾町　18世紀後半）がある。

架構は全て上屋梁上に叉首を組む。上屋筋の柱を省略し下屋を部屋に取りこむ形式は18世紀には既にみえ，一方上屋筋の柱を省略しない形も明治まで残る。　（島田敏男）



岩本泰一家断面図・平面図